

アカデミック・ライティング支援のいま



MEMBER

小林 至道

青山学院大学アカデミックライティングセンター助教

飯野 朋美

津田塾大学ライティングセンター客員講師

太田 裕子

早稲田大学グローバル・エデュケーション・センター准教授、
アカデミック・ライティング教育部門長

土屋 和代

東京大学大学院総合文化研究科教授、
駒場アカデミック・ライティング・センター長

司会
松田 美佐

中央大学文学部教授、
広報・情報委員会大学時報分科会委員



自立的な書き手を育てる

ライティングセンター

松田 欧米の大学では1950年代から、レポートや論文執筆などにおいて学生の文章作成を支援するライティングセンターが設置されました。日本では、2004年に早稲田大学でライティング・センターが開設されて以来、各大学での設置が進められてきました。そして現在、多くの大学では、文章の添削だけではなく、書き手の自立を目指す文章を書くプロセスを指導していく、アメリカで誕生したライティング指導の理念を踏襲したライティン

グセンターの運営が行われています。その一方で、生成系AIの登場により、アカデミック・ライティング支援は新たな局面を迎えています。書くという行為は、学生時代のみならず卒業後の人生においても不可欠な行為であり、論理的な思考力を磨く手段にもなります。今回は、各大学でライティングセンターに関わる先生方にお集まりいただき、運営方法や課題、生成系AIへの対応、学生にとっての「書く」ことの意義まで、幅広い話題について議論を交わしたく思います。まずは、各大学におけるライティングセンター設立のきっかけや趣旨、目的などについてお話しただければと思います。

小林 青山学院大学の小林です。私は、2017年度から青山学院大学「アカデミックライティングセンター」（以下、AWC）の専任教員として、運営・管理を担当しています。AWCは、本学が策定した「AOYAMAVISION」の取り組みの一環として、2017年10月に設立されました。大学図書館に属し、正規課程に在籍する学部生、大学院生、留学生を対象にした授業外の学習支援施設として位置付けられます。「自立的な書き手を育てる」「国際的に通用する文章の書き手を育てる」「普遍



的な書く力を有する学生を育てる」という3つの理念を掲げて、学生の「書く力」を高める目的で運営しています。支援対象は、日本語あるいは英語で書かれたアカデミックな文章（レポート・論文・発表資料・留学の志望理由書など）です。開設当初は対面のみでしたが、コロナ禍を経て、現在は対面とオンラインの両形式で行っています。

飯野 津田塾大学の飯野です。本学の「ライティングセンター」は、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択された取り組みの一環として、2008年に設立されました。採択された取り組みのテーマは、「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」というものでした。社会に出ると多様な人に自分の考えや思いを伝える力、相手の意見を理解して受け止める力が必要になります。その力は「書く力」に支えられているのではないかと考え、テーマを設定しました。日本語の相談では、アカデミック・ライティングだけでなく、エントリーシートや企画書をはじめ、手紙や成人式のスピーチ原稿などあらゆる文章を対象にライティングの指導を行っています。そうしてキャリア支援につなげ



ることで、社会でリーダーシップを発揮できる女性の育成を目指している点も特徴の一つです。

きっかけは英語学習支援から

ニーズに合わせて支援の幅を拡大

太田 早稲田大学の太田です。本学の「ライティング・センター」は、2004年に国際教養学部専用の機関として設置されました。英語学位プログラムを導入した国際教養学部では、英語によるレポートや論文の執筆を支援する必要がありました。そのため、設立当初は英語文章を英語で検討する「English paper discussed in English」、略してEEセッションだけを実施していました。しかし、日本語を母語とする学生の多くにとって、英語で会話をするEEセッションはハードルが高い状況でした。そのため、英語の文章について日本語で話し合うEJ（English paper discussed in Japanese）セッションを開始しました。本学ライティング・センターが最も大切に行っている理念は、『自立した書き手の育成』です。つまり、セッションが終わった後に、書き手が自分で文章を書



小林 至道氏

けるよう支援することを目指しています。そのためには、チューターとの対話の中で、書き手が自分の意図や考えを言語化することが大切です。EJセッションでは、書き手が自分の得意な日本語で、英語文章について議論することができのです。「EE」「EJ」セッションに加えて、日本語で文章を書く学生のために、日本語の文章

を日本語で検討する「J-J (Japanese paper discussed in Japanese)」セッション、留学生が日本語で文章を作成するための支援として「J-S (Japanese session for 2nd language learners)」セッションも開設されました。設立当初は国際教養学部専門機関でしたが、現在は全学の学部生、大学院生、教員が利用できるようになっています。

土屋 東京大学の土屋です。私は、2025年度4月から「駒場アカデミック・ライティング・センター（以下、CAWK）」のセンター長を務めております。本学教養学部では、1、2年生が英語の必修科目を学ぶ際の支援組織として、2008年から「駒場ライターズスタジオ（以下、KWS）」を運営してきました。英語の必修科目は大きく3つに分かれており、「FLOW (Fluency-oriented Workshop)」というアカデミック・ディスカッション、「ALFESSA (Active Learning of English for Students of the Arts)」という文系学生向けのライティング、「ALFESSS (Active Learning of English for Science Students)」という理系学生向けのライティングがあります。「ALFESSA」と「ALFESSS」では、1学

期間かけて英語の学術小論文を作成するのですが、KWSはそのサポートを行ってきました。その後、2022年に、KWSを組み込む形で全学レベルの組織として新たに設置されたのがCAWKです。当初は、1、2年生の英語学習支援が主な目的でしたが、徐々に支援の幅を拡大しており、初修外国語の学習サポートや留学生向けの日本語学習サポート、大学院生のピアサポートなども行っています。こうした取り組みにより、1年次から自立的、自発的な書き手を育成することを目指しています。

ライティングセンターの財産は人 チューター育成を重視

松田 中央大学では、2011年度に多摩キャンパスで「ライティング・ラボ」が開設されました。当初は大学院の留学生を対象に日本語で文章を書くためのサポートを行っていましたが、その後は各大学と同様に日本語を母語とする学生も対象にするなど支援の幅を広げています。本学でも自立した書き手を育成することを目指しており、対話を通じて理解を促すことが重要だと考えてい



飯野 朋美氏

ます。大学院生がチューターとして指導する形をとっていますが、希望者が減少傾向にあり、チューターの確保が難しくなっているのが現状です。続いて、どのように指導体制を構築しているのか、またどのような課題があるのかをお聞かせいただきたいと思います。

土屋 CAWKでは、所属するスタッフが教員に呼び掛

けて、関心のある大学院生をチューターとしてリクルートしています。原則としてチューターと学生は、1対1の対面でセッションを行います。複数人で学術小論文を作成する場合などには、グループ対チューター1名でセッションを行うこともあります。研修にも力を入れており、「TA（ティーチング・アシスタント）」として雇用する大学院生に対しては、教員と専門職員によるオリエンテーションに加えて、授業の見学やレポート報告、研修への参加を課しています。TAは経験を積むと「TF（ティーチング・フェロー）」になり、TAに助言しています。その後も、教員や専門職員からフィードバックを得ながら経験を重ね、学生の支援に当たっています。

太田 本学のアカデミック・ライティング・プログラムでは、学部生向け授業「学術的文章の作成」とライティング・センターという2つの教育実践を行っています。双方において、大学院生のTAが文章の個別指導・支援に当たっています。日本語文章担当のTAは、専任教員が開講する14週の授業を履修し、優秀な成績で合格した人です。ライティング・センター付きのTA（チューター）を希望する場合は、面接審査に合格する必要があります。

英語文章担当のチューターは、全学から募集し、書類と面接によって審査します。採用された新人チューターは、先輩のセッションの見学、先輩の監督下でのセッション実施を各5回以上行います。「独り立ち審査」に合格してある程度経験を積んだ上で、安定して質の高いセッションができるかどうかを見る「教育補助審査」を受けます。また、全チューターが毎週ワークショップ形式で1時間15分の研修に参加し、セッションの質を高めます。ライティング・センターの財産は人ですので、このようにチューターの研修・育成については、多くの力を注いでいます。

ライティング教育の学びがベースに 支援のコツをつかむヒント

飯野 本学では、現在は専属教員のみですが、センター設立から数年間は大学院生がチューターとして携わっていました。相談の実践に関する本で独習し、教員のセッションを見て学び、その後教員同席の下、1人でセッションを行って、フィードバックをもらう形で育成を

行っていました。ポータルサイトでの相談報告書の共有は、チューターにとって重要な学びとなります。また、チューター・ミーティングで課題とその解決法を話し合うことで、実践に対する自信を付けていく様子も見て取れました。アメリカのライティングセンターをいくつか視察したことがあるのですが、印象に残ったのは、学



太田 裕子氏

部生がチューターをしていたことです。それが可能なのは、初年次教育としてライティング教育がしっかり行われているからだと思いました。そうしたベースがあれば、チューターを志望する学生が多く出てくるのではないかと思います。私自身、学部時代の必修科目で英語の論文の書き方を学んだのですが、それが英語で論文を書く時はもちろん、社会に出てさまざまな文章を書く際や、現在のライティングセンターの仕事でも役立っていると感じています。やはり、ライティングの授業を受け、執筆のプロセスをしっかりと学ぶことが、まずは重要だと思います。

小林 本学もAWCでのセッションを担当するのは、大学院生のチューターです。チューターは毎年度前期と後期に1回ずつ、学内の公募に加え、研究科や先輩チューターからの推薦で募集しています。チューターは、ライティング支援・教育の専門性を有するAWC教員が作成した研修プログラムの受講を通して、1〜2カ月かけてライティング支援方法の基本を学びます。AWCでの支援は、一方的な添削ではなく、対話を通じて書き手本人の気付きを促すという独特の方法を取ります。そのコツを

つかんでもらうために、まず講義形式で支援方法の要点を学び、その後に模擬セッションを行い、研修後のOJTと合わせて、チューターとしての経験値を積むことを重要視しています。現状の大きな課題の一つは、英文のライティング支援をできるチューターが集まりにくいということです。本学は規模の割に大学院生が少なく、英語論文の執筆経験が豊富なチューターの確保が開設以来ずっと困難な状況です。その点に関して、打開策を考えなければならぬと思っています。



ライティングセンターへの入り口

セッション参加の前に、気軽なスタイルから

松田 本学では、昼休みにライティングのオンライン講座を開催するなど、1対1のセッション以外にもライティング支援を行っています。各大学でそうした例があ



土屋 和代氏

れば教えてください。

太田 本学では、学部初年次生を主な対象として、「学術的文章の作成」という単位科目を開講しています。この科目は全学の学部生が履修でき、4つの学部1年生の必修科目となっています。また、全学部の新入生を対象とした視聴必須セミナーとして、レポートや論文の書き方を20分程度の短い動画で配信しています。他にも、1学期に1〜2回のワークショップを開催して、問いの立て方、研究計画書の書き方、引用の仕方等、ニーズの高いテーマでワークショップを開催しています。

飯野 本学では、『レポートの書き方』という小冊子を作成して配布しています。A5版の薄い冊子で、論文の書き方をコンパクトにまとめています。元々、PDF版もWebサイト上に掲載しているのですが、中には小冊子がポロポロになるまで使っている学生もいます。また、週に2回、ライティングカフェというイベントを開催しており、英語話者の先生とオンラインで気軽に英語でしゃべりできる場を作っています。予約不要でハードルが低いので、それをきっかけにライティングセンターへ相談に来る学生もいます。

小林 本学でも2018年度以来、昼休みの時間帯に、アカデミック・ライティングの基本的な作法・ルールを1回30分で気軽に学べる場を設けています。コロナ禍を機に、教室での実施からオンライン動画の配信に切り替え、現在は1回30分の動画7本を大学のLMS（学習管理システム）にアップし、学生がいつでも・どこからでも視聴できるようにしています。また、専任教員から依頼があった場合、授業の1コマ（90分）を使って、AWC教員がレポート・論文の書き方に関する出張講義をするという連携も行っています。

留学生の増加と多言語化への取り組み

松田 各大学のライティングセンターがさまざまな形で支援に取り組まれていることがよく分かりました。日本語を母語とする学生向け支援が充実していく一方で、近年は留学生の増加に伴い、多言語化への対応も求められています。その点に関して、どのような取り組みをされているかをお聞かせください。

土屋 本学の駒場キャンパス自体が、例えば「グローバ

ル・スタディーズ・イニシアティヴ（GSI）」というプロジェクトを実施するなど、複数の言語・地域にまたがる研究・教育を推進しています。CAWKは、そのような環境下で留学生や日本の学生を支援する一方、外国語クラスの先生方の支援・協力も得ながら、さまざまなバックグラウンドを持つ留学生の方にもTAとしてライティングやスピーキングの支援を行っていただいています。長年にわたり多言語化に向けた努力を重ねてきた、と言えます。

太田 本学のライティング・センターでは、4つのセッションカテゴリーに加えて、会話の言語を多言語化しています。2025年秋には、英語文章をベトナム語で検討するEVセッション、日本語文章を中国語で検討するJCセッションを開設します。過去にも、同様の取り組みを実施していましたが、セッションを審査できるスタッフがいらないという理由から、取りやめた経緯がありました。これからは、ライティング・センターの理念をしっかりと研修した上で、多言語化を推進していく方向で考えています。

小林 AWCでは留学生に対しても一般の学生同様に、



日本語での対話によるライティング支援を行っています。ただ、留学生の日本語のリテラシーは個々人で大きな差があり、ネイティブと変わらない日本語のリテラシーを持っている留学生もいれば、文法の基礎から学ばなければならぬ人もいます。そのため、日本語でアカデミックな文章を書く以前の基礎的な日本語教育は正課授業で、日本語で書かれたアカデミックな文章の支援はAWCで……といった具合に、正課授業とAWCで役割を分担しながら、留学生の支援を行っています。しかしながら、留学生にとっては、そのすみ分けが分かりにくく、AWC

を利用するハードルが高い印象を持たれることもある点は、現在の課題です。

生成系AIの登場

「書くこと」にもたらした影響

松田 近年の生成系AIの登場は、本学でも悩ましい問題となっています。大学としての方針は定めているものの、生成系AIで作成したと思われるレポートや論文が目につきます。ライティングセンターとしても大きな影響を受けているかと思いますが、現状や課題についてお聞かせいただければと思います。

飯野 生成系AIで書いたと思われる文章を読むと、一見、上手に書けているようで、どこかのっぺりとした印象を受けます。その理由は、文章の中に自分が考えた「思考の跡」が見えないからだと思います。ある学生が何かの志望理由を生成系AIに書かせたところ、「自分の志望理由に感じられない」と思ったそうです。それこそがまさに生成系AIが書いた文章の特徴だと思います。試行錯誤して書いた文章であれば、どこかにその形跡が見ら

れ、実感を伴った言葉が出てくるはずです。本学のライティングセンターの役割の一つが、学生が持っている潜在的な力を引き出すことだと考えています。問い掛けを重ねて、学生が考えていることを引き出していくことが大切ですし、自分自身に問い掛けながら書くことで、自立した書き手になっていくのだと思います。ライティング教育は、ただ文章の書き方を学ぶだけでなく、資料を読み解いたり、クリティカルに考えたりするなど、大学教育に必要な大切な要素が詰まっています。そうした学びをライティングセンターとして支援していきたいと考えています。

太田 生成系AI利用への対策については、まだ手探りの状況です。授業で指定の参考文献を引用して文章を作成する課題を出した際、参考文献の内容を改ざんしたり、実在しない文献を捏造ねつぞうしたりした文章が見られました。生成系AIに文献を読み込ませ、引用するよう指示したことで起きた事象です。生成系AIは参考文献を勝手に要約したり、架空の文献を作成したりする性質があるため、原文と異なる内容が記載されていたのです。学生が生成系AIを使う理由は、「時間がなかった」「楽を



松田 美佐氏

したかった」「文章を打ち込むのが面倒」「長い文章を読むのが面倒」というものでした。自分で読んで考えたり、手を動かして書いたりすること自体を放棄する学生が一定数いるのです。他者が懸命に考えた文章を改ざんすることは著作権を侵害する行為ですし、生成系AIであっても他者の情報を使う場合は引用し出典を示す必要があります。

ります。ライティング・センターとしても、自分の考えや文章と、生成系AIを含む他者の考えや文章を明確に区別することの大切さ、自分自身で思考することの大切さを、これまで以上に伝えていく必要があると痛感しています。生成系AIは一瞬で情報を提供してくれますが、ライティング・センターのセッションはじっくり時間をかけて行います。書き手が考え、迷い、決断するプロセスに寄り添って待ちます。この、時間のかかるプロセスが、生成系AIにはない、ライティング・センターの強みだと思います。また、生成系AIは書き手を批判しません、人間の読み手からは素朴な疑問や批判的な問い掛け、「分からない」という反応が返ってきます。そうした「人間の『読者』の視点」を持ち、自分が書いた文章を批判的に振り返る大切さも伝えていきたいと思っています。

生成系AIの限界 重要性を増す人間の「書く力」

小林 生成系AIの登場とともに、直近2年間のAWC

の利用者が少なからず減少している実感があります。生成系AIはボタン一つですぐに答えを出してくれますが、大学生にとっては、自分の頭で考えて、自分の手で文章を書くというプロセスが重要なことは間違いありません。こうした時代的な変化を鑑みて、AWCとしては、人々とのコミュニケーションを通してしかできないことがあるという強みを自覚し、その強みを前面に押し出す形で、組織的な運営をしていかなばならないと考えています。

土屋 本学では、2023年に生成系AIの使用に関する全学的な方針を打ち出しました。生成系AIの使用を一律に禁止することはせず、使用については各担当教員に判断を委ねつつ、大学での学びにおいては知識生成の過程や洗練化の過程を通して思考能力を高めることが重要である、という大原則を確認しています。生成系AIの可能性を積極的に探りながらも実践的な注意喚起も重視しています。具体的には、生成系AIが作成した文章をそのまま使わず、誤りやアルゴリズムに基づくバイアスが存在する可能性に注意を払い、必ず自ら文章を吟味して修正するよう促しています。他にも、著作権や情報漏洩の問題などに配慮した方針を打ち出しており、C

AWKではそれらの方針に基づいてTA・TFの指導を行っています。ところで、先日、2026年には生成系AIの性能向上に必要なWeb上のテキストデータが枯渇する可能性がある、との報道がありました（「データが足りない、ChatGPT5も伸び悩み？」 業界が探る対応策」『朝日新聞』2025年8月31日）。その解決策として、生成系AIが出力したテキストを再び生成系AIが学習する方法が検討されているようです。しかし、その場合、生成系AIが生み出した誤りや偏りが学習に取り込まれ、将来の出力に影響する恐れがあります。そもそも幅広い知識の獲得を十分にできない可能性も指摘されています。そうした報道を見て、生成系AIの進歩によって人間が文章を作成する必要が減るどころか、人間が書いた良質な文章がより一層求められる、という逆説的な状況が生まれていると感じました。アカデミック・ライティングは生成系AIの登場により、これまで以上に重要性を増しているように思います。

書くことは考えること

情報共有からライティング教育の発展へ

松田 非常に参考になるご意見をありがとうございます。最後に、ライティングセンターの今後の展望について、皆さんの考えをお聞かせください。

太田 本学のライティング・センターの利用者数は、生成系AIの影響もあってか、減少傾向にあります。あらためて、存在を周知するための広報活動にもっと力を入れなければならないと感じています。本学は規模が大きく、ライティング・センターの利用者もそれなりにいますが、それでも全学生の3%に満たない状況です。人と対話するライティング・センターの存在や良さを周知できれば、自分で考え、書くことを楽しめる学生に、もっと利用してもらえるようになると思っています。

土屋 皆さんのお話を伺い、アカデミック・ライティングとは、近年よく議論されている「ネガティブ・ケイパビリティ」、つまり答えの出ない事態に耐え抜く力を鍛える方法ではないかと思いました。文法的な正しさや、文章としてのもっともらしさだけでなく、独創的な発想力、

それを支える確かな検証能力や根拠の示し方、そして自分らしい文章やスタイルを育むことがライティング・センタールの役割である、とあらためて感じました。

小林 今回の座談会を通して、各大学がさまざまな創意工夫の下、素晴らしい試みを実践されていることを知りました。ただ、せっかく培われた実践知が、各大学の取り組み内で埋もれてしまいがちになっていると感じています。そのため、そうした創意工夫や具体的な実践をもっとオープンに情報共有して、各大学の関係者が相互に交流していけるようなコミュニティが必要なのではないかと思っています。

飯野 ライティングセンターの取り組みは、成果が見えにくいところが課題だと感じています。また、正課科目との連携もまだ進んでおらず、学内での認知度も十分ではありません。そうした課題を解決するためにも、小林先生がおっしゃったように、ライティング教育に関して大学間で情報共有していくことが重要だと思います。そうしてコミュニティが広がることで、日本のライティング教育やライティング支援がより良いものになっていくことを期待しています。

松田 私自身、常日頃から本学のライティング・ラボを利用して、ライティング支援の有用性を実感しています。その活動をさらに広げていくためにも、先生方がおっしゃるような情報共有を進めていく必要があると思います。今回の座談会を機に、そうした動きが始まることを期待しています。本日はありがとうございました。

